

論文の内容の要旨

論文題目 日本人英語学習者の自律的学習モデルの構築とその展望
—学習者の特徴により学習プロセスにはどのような違いがあるか—
Creating Autonomous Learning Models of Japanese Learners of English
and Their Development :What Differences Do Learners' Characteristics Make
in Their Learning Processes?

氏名 河内山晶子

本研究が扱うテーマ「自律的学習」は研究者にとっても教育者にとっても、関心の高いテーマである。やる気を明確に持った学習者は少なく、たとえやる気があったとしても、それが成果につながるまでの手立てが分からず、せっかくのやる気が空回りするという現象は多々見られる。教師は自律的学習の重要性について認識はしているものの、実際にどのように伸ばしていけばいいのかについては明確に理解していないことが多い。そのような中、方略指導に力点が置かれがちであるが、このような教え込むことに偏重した指導こそむしろ他律的であるといえ、学習者内部に潜在する自律を引き出し、伸ばしていくという観点こそが望まれよう。つまり、学習者自身の持つ動機などの因子の中に、方略開発の原動力を見て取り、育てていくといったアプローチである。

そのためには、動機や方略というような学習者因子を単独で捉えた研究ではなく、動機、方略、その他の学習者因子の因果関係までも視野に入れた研究が必要である。そのことの重要性を主張したのが、Pintrich and De Groot (1990)である。彼らは様々な自律的学習者要因を動機づけの要因群と方略的要因群に二大別して整理し、両者の間の相関関係を指摘した上で、学習において成功するためには、“will (意志)”と“skill (技能)”の両方を持つ必要があると説いた。そして、この両者が統合された、しかも諸要因間の因果関係を明らかにした学習モデルが構築される必要があると主張した。

そのような、要因間のインターアクションまで扱った学習モデルを、日本での「外国語としての英語学習」という文脈で構築した研究は少ない上、それらにも補うべき課題は多い。まずあげられる課題としては、モデルにメタ認知方略と情意の要因が考慮されていない

点で、本研究では、それらを含めたモデルを構築した。メタ認知方略は、自分を客観的に捉える認知で、動機づけや情意といった極めて情動的な要因と、学習方略という極めて認知的な要因との間に介在する要因として位置づけた。また自信や不安といった情意要因は動機づけと離して考えるべきでないとしてともに一層内に位置づけた。また、先行研究での日本人のためのモデルは、学習者全般に一律に当てはめたモデルであって、学習者の持つ多様な能力、多様な自律的学習要因に対応したものではないため、本研究では、それらの違いが、学習プロセスにおける違いとなって浮き彫りになるようなモデルを目指した。

モデルの構造の仮定にあたっては、Kochiyama(2001)および河内山(1994)を基に、上記のメタ認知方略と情意を加え、「動機づけ・情意→メタ認知方略→方略→能力」という「5 要因 4 層」の枠組みとした。この枠組みの全体像は、Pintrich 他で言及された要因群の概念に依拠し、「メタ認知方略→方略」という流れは、Chamot(1990)、Oxford (1990)、Wenden (1991)に依拠するものである。

実験は、大学 1 年生英語学習者 804 名を対象に実施された。動機づけ、情意、メタ認知方略、方略の 4 要因は、Pintrich 他 (1990) で使用された MSLQ 質問紙を日本人に適合させた質問紙によって測定され、能力要因は語彙、作文、読解、聴解の 4 領域別に測定できる標準テストによって測定された。

実験により得られた学習者要因を因子分析したところ、16 の因子が抽出された。この 16 因子に能力因子の 4 因子を加えた 20 因子を、仮定した構造に入れ、それらすべての因子を結ぶ関係線を引き、この中からモデルに使う関係線を選定することとした。本モデルは、特徴ある学習者において、学習プロセスにどのような違いがあるかを浮き彫りにして、教育実践に役立てることを目的としているため、モデルに残すべき関係線を選定基準を次のようにした。まず有意な関係線であること、習熟度別に有意差のある関係線であること、成績変化別に有意差のある関係線であることである。その結果、27 本の関係線が選定され、本研究が目指す自律的学習モデルが構築された。

次に、この構築されたモデルを使って、様々な特徴を持つ学習者の学習プロセスの違いを分析した。様々な特徴の学習者とは、ある因子の上位・下位の別で群分けした学習者のことである。能力の 4 因子による群分けに、英語総合力、成績変化での群分けを加えた 6 通りの分析と、学習者因子 16 因子での群分けにより、総計 22 通りの分析となった。

この分析結果を基に、考察が三つの観点から展開された。基本モデルでの考察と、分析一覧表を縦断的にマクロの観点で見た考察と、横断的にマクロの観点で見た考察である。

まず構築された基本モデルにより、学習者全般の特徴と成績上位群の特徴はどのように違うかが考察された。最も違う点は方略と能力をつなぐ関係線が上位群では強いことで、上位群では方略が適切に使われ、成果につながっていることがわかった。両者のこのような差の原因は何かについては、縦断的考察で明らかにされた。縦断的考察では、因子、要因、要因群と枝分かれする際の観点ごとに次々に比較していった。すると、動機づけ的要因の強い学習者と、方略的要因群の強い学習者で比較した際に、際立った違いが認められた。

前者はメタ認知方略から方略への関係線が強く、後者ではその関係線が弱いことが明らかとなったのである。後者は方略をよく使う学習者であるにもかかわらず、動機→メタ認知方略→方略というように、「関係の中で得られた方略」が存在していないということは、彼らが使っている方略は、外から得たものであることになる。一方、成績上位群は内的動機づけや効力感が高いという特徴はすでに検証されており、このことから、前者である、動機づけ要因群の高い学習者には成績上位群が多いということが考えられる。このように、上位者は自分の動機から発して、メタ認知方略を使い、工夫して得た方略を使いこなしているということが認められた。

このことから、方略は外から得た知識注入型の方略よりも、自分の動機づけから生まれ、自分の持つ状況に照らして工夫され、モニタリングしながら編み出された方略のほうが成功しやすいということが明らかとなった。因子だけがピンポイントで外から強化されるよりも、学習プロセスの中でインターアクションの効果で相乗的に強化されていくような「関係性の中で」強められた方略のほうが、成果を上げていることが明らかとなったのである。

そこで「関係性の中で強化された因子は重要である」という知見を得た次の段階として、モデルにおける 27 本の関係線の中で、どの関係線が特に注目に値する関係線かについて、横断的に考察した。なるべく多くの局面において、その因子の上位群・下位群を差異化している関係線を見たところ、7本が抽出された。そのうち特に強いものは 4 本であった。上位群において強い関係線としては、「訓練思考動機→モニタリング」「モニタリング→理解方略」が上がり、下位群において強い関係線としては「相対的効力感→モニタリング」「モニタリング→統合方略」があがった。それらを本研究が構築した自律的学習モデルの中で位置づけると、図 1 のようになる。

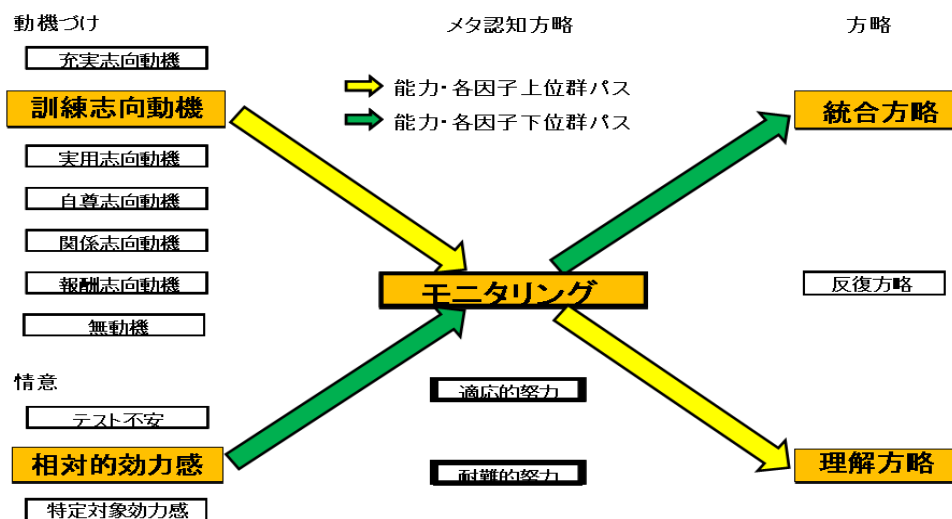


図 1 重要な 5 つの因子と 4 つの関係線

このように、16 の因子の中でもモニタリングを要にしたこれら 5 因子が重要であること、51 の因果関係線の中でも 4 つの関係線が重要であることが明らかになった。

以上の分析と考察を踏まえた教育的示唆としては、「学習は能力の活性化になる」ということを意識した訓練志向動機や、できることで1つずつ達成感を重ねて「自分にはできる」という相対的効力感を持つことで、モニタリングを活性化させ、それにより理解方略や統合方略が促進されることに重点を置いた指導がなされることである。このように、理解方略や統合方略の養成にあたっては、「動機と自信という基盤」のもとに育成されることが重要で、努力も単なる努力ではなく、「モニタリングを伴った努力」により、自ら工夫して方略を編み出していくことが望まれる。またこのような総論的知見のみならず、詳細な各論的知見もすべて実践に活かされるように、分析結果を「上位群下位群の特徴とその指導法」としてまとめ、それを基に実践用に教師用カルテと学習者用シートが作られた。

今後の研究課題としては、動機づけ・情意を支え活性化するのは何か、また動機づけ・情意の間の支えあいについてさらなる研究が求められる。またモニタリングを適正に測るための質問紙の改善も必要である。本研究では、成果はどのように方略によって違ってくるのかを考えるだけでなく、方略はメタ認知方略によってどのように活性化され、そのメタ認知方略は動機づけ・情意によってどのように活性化されるのかを見ていくという、視野をプロセス全体に広げた展開をした。5要因が4つの層でこのようにつながったところで、「ではその影響の発動源である動機・情意は、何によって影響を受けるのか」についても今後さらなる研究が必要である。その際、Zimmerman (1998) の学習サイクル理論を参考にしながら研究を展開し、螺旋上昇する循環的学習としての仮定をして研究を続けたいと考えている。